

感想文部門 金賞

「わかりあえないことから」(木下宏明・土岐市)

[おすすめしたい本:平田オリザ『わかりあえないことから』(講談社)]

背表紙のこの言葉と著者が目に入った瞬間、私は迷いなくこの本を書店の書架から引き抜き、レジへと足早に向かっていた。以前、芝居に少し関わったこともあり、その著者への信頼感もあったのだが、なによりその『わかりあえないことから』というタイトルが私を捉えて離さなかった。

そのころ、人間関係の有り様に悩みながらいろいろと模索していた時でもあり、どうしたら「わかりあえるのか」ということが常に頭の片隅にあった私にとって、そのタイトルの逆説的提示がピタッと心に貼りついた。

実は、私はある当事者グループと関わり、その運営にも携わっている。さまざまな思いや痛みなどを抱える当事者同志が集まり、交流をしたり、思いを分かち合ったりする取り組みを続けているのだが、ある知人から「そんなことをしても“傷のなめあい”になるだけじゃないの？」という言葉がなげかけられた。そこには、自己満足的な慰め合いに終わるのではとの否定的ニュアンスが伴っていたのだが、当事者である私には、どうも誤解があるような気がしてならない。

実際に多くの方々のお話しをお聞きするなかで分かってきたことだが、当事者といえども本当にさまざまで、一人一人その背景も心の運びも違っている。“傷のなめあい”をやるうにもそう簡単にできるものではないと言うのが私の実感だ。

それぞれの人たちの傷がどういったものなのか、どんな傷つき方をしているのか、傷の深さはどうなのかなど、しっかりとその傷の有り様が見えていないと“傷のなめあい”などできるものではない。むしろ“傷のなめあい”がきちんとできればすごいことだと思う。当事者間においても「わかりあう」ことはなかなか難しいことなのだ。

一方で、当事者の側からも他者への不信が表明されることが多々ある。「どうせ体験したものでなければわからない」という心情の存在だ。私自身もこの感覚にとらわれたことは何度もある。が、私はこの当事者、非当事者の間に明確に線を引いてしまう発想にどこか違和感を感じてしまうのだ。何とか関わりを工夫出来ないものかと思ってしまう。

そんな時、平田氏のこの著作に出合ったのだ。表面的、日常的「会話」でもなく、ディベートのような議論「対論」でもなく、「わかりあえないことから」出発し、おたがいの違いを見つめながら、丁寧に意見や思いを擦り合わせていく「対話」の文化を創り出していきたいとする平田氏の提示は、人間関係の有り様に悩んでいた私にとっては、本当に示唆に富んだ納得のいくものであり、とても励まされるものだった。その文章からも、演劇人らしい「人間の想像力」への信頼感を感じ取ることができて、最後まで興味深く読み進めることができた。

日々、人と接し、その関係の有り様に心砕いている方々に、是非、お勧めしたい一冊である。